

## 江戸期舞楽における動作様式の変遷——左方舞の下肢動作に着目して——

田 敏 智 志

本研究は、舞楽の動作様式が、中世初頭以降どのように変化して現在の様式に至ったか、その実態を、あらゆる形態の史料（舞譜・楽書・舞楽図・伝承）に基づいて解明するものである。筆者は前稿（第45巻3号掲載）において、中世初頭舞楽の動作様式について考察し、当時の舞楽が「足踏パターン」を基本とする動作であることを明らかにした。下肢部の動作は、舞踊の本質を左右する。今日の舞楽は、摺り足を基本とする静淑な動作となっている。則ち舞楽は、長い伝承の歴史の中で、「足踏」から「摺り足」へとその本質を変化させているのである。では、現在のような摺り足様式がほぼ確立した時代はいつか。筆者が最も注目する時代、それが江戸期である。

本稿では、まず各時代の舞譜の譜語列を比較検討することによって、言葉の表記から動作様式の変化を探った。比較した舞譜史料は、『掌中要録』（1263 写）と、江戸期舞譜3種——1『舞之譜』（1634）、2『左舞案譜』（1784）、3『雅楽全譜』（1870）——である。比較譜を作成して検討した結果、中世の足踏動作は、江戸期の中に現行舞譜にもみられる譜語「突」「摺」「踏」へと分化したことがわかった。その中で現行舞楽に最も多くみられる「摺」は、記譜上の変化では「1 ふミ→2 チヨトシ（一寸とし）→3 摺」となっていて、（名称としては）江戸末期ころに確立したことがわかった。以上の現象は、江戸期の舞楽図史料（身体構図）を検証することによっても確認された。

ところで、日本各地には中央の舞楽が伝播したものが伝承されている。それらは、中央の（現行）舞楽の動作様式とは全く異なっている。郷土的という印象をうけるそれら地方舞楽の舞姿（足踏動作や前傾姿勢など）は、実は、急速な様式変化を遂げる江戸中期以前の、あるいは過渡期江戸中期における中央舞楽の動作そのものであることを指摘した。